

私 の 心 に 残 つ た 本



## 余命1ヶ月の花嫁

医療科学部講師  
(臨床検査学科)

金子 千之

私の心に残った本で今回紹介させて戴きますのは「余命1ヶ月の花嫁」という本です。テレビ、映画、DVDをご覧になられた方、また、本を読まれた方も多数見えると思います。もし、自分の大切なヒトが余命1ヶ月と宣告されたらあなたはどうされますか？長島千恵さんは23歳で癌にかかり、24歳6ヶ月でお亡くなりになられた方です。現在、3人に1人は癌で死亡し、殆どのヒトが中、高年以上と言われています（例外もあります）。日本は長寿国で女性は世界第1位（平均寿命約86歳）、男性は世界第3位（平均寿命約79歳）ですが、長島千恵さんのように若くして天国に逝かれるヒトもいるという事です。長島千恵さんは24歳6ヶ月で永遠の眠りにつかれた訳ですが、ヒトは生まれたら必ず死を迎えます。即ち、私たちは死に向かって生きていると言っても過言ではありません。ヒトの体は約60兆個（それ以上）の細胞から構成され、この1個の細胞がある日突然、癌化し、増殖して全身に転移します。

話は変わりますが、私が大学4年時（昭和54年）卒業論文先は七栗生薬研究塾（現在：藤田記念七栗研究所）を希望しました。生薬研究塾には故藤田啓介総長（当時学長：54歳）先生をはじめ、若い先生が見え、日夜研究に没頭していました。また総長先生の誕生日会や七栗の忘年会での挨拶の中でよく言われた事は「いつ病にかかり、倒れるかは解らないから今日出来る仕事は今日の内にやり遂げなさい。」即ち、一日一日を大切にし、健康管理には十分に気をつけることを教えられました。

私事で恐縮ですが、今年で53歳になり、いつ何時、病気（心筋梗塞、脳梗塞、癌など）に侵されるか解りません。この本を読む事により、総長先生のお言葉を思い出しました。長島千恵さんは23歳の秋頃に左胸に凝りがあり、最初は気にせずに普通に生活していましたが、その凝りが次第に大きくなり検査の結果、乳癌と診断され、診断名は若年性乳癌でした。その後、入院中の症状として、吐き気、嘔吐、下痢、便秘、毛が抜けると言った具合です。その後の治療方法として抗ガン剤を使用し、乳房切除術、転移、再入院などに

「余命1ヶ月の花嫁」

TBS報道局 編

（マガジンハウス）

ついて詳細に書かれています。そして最後の章では結婚式、モルヒネの点滴使用（本人には告げず）、病状の悪化、お別れといった具合に書かれています。

長島千恵さんは亡くなる前にTBSの取材を受け、次の様に述べています。  
Q&Aを原文のまま掲載します。

Q：自分と同じ若い人に伝えたいことはどういうことですか？

A：私もそうなんだけど、自分がなるまですごい他人事なんですね、病気って。よく親が死んでから親孝行したくなるって言いますけど、本当に自分が病気になってからじゃないと健康であることのありがたみがわからない部分が多いと思うんです。本当に病気になってからじゃ遅いんだっていうのをわかってもらって。早いうちに防ぐことが大事だと思うので。特に若い人は進行も早いし、再発の可能性も高いし。若い人ほど自分の健康管理はちゃんとしてほしいと思います。

恐らく、自分が異常に気付いた時に、病院を受診していれば助かっていたのではないかでしょうか？

さて、私はがん検診の啓発運動として子宮の日（4月9日）や健康祭り（9月中旬頃）に参加し、街頭で資料を配布したり、癌細胞について顕微鏡で説明を行っています。また、NPO法人ぴあサポートわかば会ではがん患者の方から色々な体験談を伺っています。

最近、特に若い世代で子宮がん、乳がんなどが増加傾向にあり、政府もその対策として無料クーポン券を配布したり、がんの受診率（欧米：80%、日本：約20%）をあげる努力がなされています。東京の某大学では女子学生ががん検診の啓発運動を実施したり、東海大学では学生だけではなく親も含めて子宮頸部がんを無くそうとする運動がなされています。

本学には多くの女子学生が在籍していますので自分の大切なヒトの為に是非、がん検診を受けて下さい。

（当館所蔵 分類番号916）

